

# 私立大学研究ブランディング事業

## 2019年度の進捗状況

学校法人番号	131095	学校法人名	立教学院		
大学名	立教大学				
事業名	インクルーシブ・アカデミクス—生き物とこころの「健やかさと多様性」に関する包摂的研究				
申請タイプ	タイプB	支援期間	5年	収容定員	16600人
参画組織	理学部、現代心理学部				
事業概要	<p>加速するグローバル社会の中でストレスが増大している。本事業では、ストレスに対する分子・細胞レベルの解明を行う。また、メンタルヘルス問題が発現するメカニズムを心理学的に探究する。生命科学研究と心理学的研究を学際融合することで、生き物とこころの「健やかさと多様性」を包摂する新たな知見を得る。その成果として、精神的健康を高めるプログラムの提案を行い、立教大学のブランドとして社会に向けて発信する。</p>				
①事業目的	<p>本事業では、ストレスについて生命科学研究と心理学的基礎研究の融合研究を行い、生き物とこころの「健やかさと多様性」をめぐる生物・人間理解と生活機能改善に関する新たな見解を公表することを目的とする。この取り組みをつうじて本学が自学のブランドとして重視する「豊かな知性」と「折れない心」の育成を、科学的研究の側面から追究し補完・補強する。</p>				
②2019年度の実施目標及び実施計画	<p>総長統括の下、研究推進チーム(生命科学グループ・心理学グループ)、学内ブランディング推進・点検委員会、学外評価点検グループによる事業実施体制で、研究の推進と学内におけるブランディング戦略・事業全体のPDCAサイクルの潤滑な運用を引き継ぎおこなう。ブランディング戦略として、2019年度もWebによる発信の他にオープンキャンパスでの入門セミナーや公開講演会などターゲット別の情報発信を積極的に進める。</p> <p>研究においては、心理学的テスト、うつ患者の行動療法、自閉スペクトラム症患者、離婚などの家庭環境、観光などの余暇と生体試料の相関について解析を進める。また、ストレスが脳神経系に与える影響についてモデル生物系を用いて解析を行う。</p>				
③2019年度の事業成果	<p>①いくつかの自己報告式および行動測定 of 心理テストと、唾液中のストレスホルモンの量との関連を調べたところ、自己報告式よりも行動測定の方がストレスを的確に把握できる可能性が示唆された。</p> <p>②うつ病求職者に対して、集団認知行動療法前のストレスホルモンを測定し、行動療法の基準値となる値を得た。</p> <p>③自閉スペクトラム症児とその近親同居家族の大便に含まれる細菌叢を解析した。近親同居家族に比べ、自閉スペクトラム症児では、細菌叢の多様性が著しく少なく、さらに酪酸を生産する細菌が顕著に少ないことが明らかとなった。</p> <p>④観光などの余暇によるストレスの低減をストレスホルモンの量として測定するプラットフォームを構築した。また、親の離婚を経験した子どもを対象として、心理教育プログラムの実施前、実施期間中、実施後のストレスの程度を、ストレスホルモンの量として捉え測定した。</p> <p>⑤モデル生物を用い、胎児期のストレスが生体での行動に影響を与えること、さらにその脳内領域を明らかにした。</p> <p>⑥ストレスが神経系にダメージを与える因子として、D-knif familyを同定した。</p>				

<p><b>④2019年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</b></p>	<p><b>(自己点検・評価)</b></p> <p>◆学内ブランディング推進・点検委員会と自己点検・評価  学内ブランディング推進・点検委員会において、2019年度の融合研究の点検・評価とPDCAサイクルの促進、ブランド発信強化について点検と評価を行った。2019年度も概ね計画通りに進捗している。研究面においては、融合研究の結果が得られつつあり、今後はその解析・解釈が重要となる。また生命科学Gからは画期的な結果が得られ、その精密な実証が必要となるだろう。情報発信の面では、ホームページでの広報を図った。またオープンキャンパス、全カリコラボ科目を企画するなど、一般の方や受験生、学生などに向けて本事業の取組みと成果を広く発信した。結果、年度当初の目標は達成できたと考えられる。</p> <p>【学内ブランディング推進・点検委員会】  [委員長]研究推進担当副総長、  [副委員長]総長室長  [委員]リサーチ・イニシアティブセンター長、理学部長、現代心理学部長、財務部財務課長、総長室広報課長、総長室企画課長、総長室教学改革課長  [事務局]リサーチ・イニシアティブセンター</p> <p><b>(外部評価)</b></p> <p>融合研究、各グループ研究で画期的な成果が得られつつある点は評価できる。また、シンポジウムやアウトリーチ活動の充実は高く評価できる。さらなる研究の進捗、学術論文としての報告が期待される。</p>
<p><b>⑤2019年度の補助金の使用状況</b></p>	<p>事業経費の執行については学内ブランディング推進・点検委員会において、ブランディング事業全体の方針確認と各年度の事業計画の承認、執行状況報告を行う管理体制を整えている。2019年度も、承認された事業計画に基づいて適切な執行を行った。</p> <p>その使用状況は、外部評価に係る謝金、成果報告書印刷費用の他、研究グループにおいて、生命科学グループは、実験機器、用品、試薬などの購入に使用した。心理学グループでは、試薬キットの購入、その他図書資料費、調査旅費等に使用した。また、解析等に従事する研究員2名およびPD、教育研究コーディネーター、アルバイト等の人件費を使用した。その主な内訳は以下の通りである。</p> <p>■研究費  [消耗品費]試薬・文具等：4,743千円  [用品費]PC、ケルインキュベーター：587千円  [研究用機器備品]液体窒素凍結保存容器、顕微鏡用レンズ：800千円  [図書資料費]書籍等：260千円  [旅費・海外出張費]研究調査等：120千円  [その他委託費]データ解析・調査委託、サンプル送付のための宅配便等：711千円  [諸会費]学会参加費（発表）：63千円</p> <p>■広報・普及費  [報酬・手数料]英文校正、外部評価、講師謝礼等：841千円  [印刷費]成果報告書印刷：155千円</p> <p>■その他  [兼務職員人件費]PD、教育研究コーディネーター、アルバイト人件費：7,128千円  [本務教員人件費]研究員(助教R)：11,113千円</p>